



浄土宗のみおしえ

⑥

人身享け難く 今すでに享く

ちよつと古い話ですが、昭和六十一年七月十一日付読売新聞朝刊、読者のページ「氣流」に、〈自殺したい、生きる意味は何？〉というタイトルで、十七歳の女高生が生きる難しさ、不安を投稿していた。全文をここに紹介するのは出来ないが、部分的に抜粋してみると、

『自殺を認めてくれる人はいませんが、死ねば楽になるとしか思えません。先生方は「死んではいけない。とにかく生きなくちゃだめだ。命は地球より重いんだ。死んじやいけない」と繰り返されるだけです。——中略——命を大切にせよ、と言われますが、どうしてなのか、意味がわからないのです。どうして、なぜ人間の命は貴く、どんなに苦しくても生きていかなければならないのでしょうか』
とこんな具合だ。この女高生のみならず、人生の壁に突当り、先輩や友人にアドバイスを求めても、適切な答えが得られない場合は、

苦しみから逃れるひとつの手立として、死を考へることは、真面目に生きようとすればする程、脳裡を過ぎるものなのかもしれない。死にたいと思っている人を目の前に、人間の命の貴さ、大切さ、重さについて説き、生きる勇氣を与えられる人がほしいならその人はほとけさまだと思ふ。

ここで、命、生きるということを考えてみよう。三歳で健康優良児。しかし、幼稚園に入園後間もなく、進行性筋ジストロフィー症という難病の床に臥し、昭和四十九年七月、十七歳でこの世を旅立ちし、羽生市生まれの甲山政弘君の詩（詩集・長い道）より、いくつかを紹介してみよう。

生きる

生きているということば
ほんとうにすばらしいことだ
なんにしてもいいことだ
苦しくたって悲しくたって
生きているからこそ味わえる
喜びがたくさんあるんだ
でも今は命をむだにする人がいる
そんな人にはきつと神が嘆くだろう
そんな命があるのなら
この僕にわけてほしいのです
僕はもつと長く生きたいんだ

彼は、自分自身の人生が永くないことを悟っている。しかし、それでもなお、一日も永く生きたいと願ひ、病と戦っている。もし命がもつと永らえたら、どう生きたいのか。

一本のろうそく

たった一本のろうそくでも

人間以上のすばらしい

生き方をしている

火をともしたらろうそく

ろうそくは自分の体をも

とかしながら人に尽くそうとし

とろとろと汗を流しながら働く

最後には体がなくなってしまうのに

短いその命なのに

悲しまず たえしのび

ああ ああ

ろうそくよ ろうそくよ

僕はおまえのようになりたい

おまえのような生き方が好きなのを
神よ！ 僕をろうそくのように

決して自分自身のためだけに、
生きたいのではなく、人びとのお
役に立ちたいと願う彼の心は、ま
さしく菩薩のそれである。

へんてつもないことだけど

春の暖かい光のなか

小鳥がさえずり

人が道を歩いていく
なんのへんてつもないことだけども
ほんとうにすばらしいな
ほんとうに平和だな
と思いませんか
僕はそう思います

私達健康人は、三度く好きな物を口に行きたい所へ行き、言いたいことを言い、したいことをして、自分の目の欲望を追求している。万一、その欲望が全て手に入り、それを手元に置いて、腕組をし、くわえタバコで眺めてみても、果たしてそれで「幸」になるのだろうか。いやそうではない、なんのへんてつもないことが出来る自分なら、その人は「幸」の真つ只中に立っているのだ。もういいかげんに、そのところへ気が付いたらどうだ。と、言われたような気がした。

片や、健康で学校に通い、死を考えている十七歳の少女。

一方、難病と戦い、命の貴さを充分に知りながら、十七年という短かい人生を閉じた少年。

さあ、私も一生懸命生きていこう。

「三心」について

——「観経疏」より——

「三心」とは、文字通り三つの心であります。

そのひとつは、「至誠心」、二つは、「深心」、三つは、「回向発願心」です。

「至誠心」とは、真実心であり、嘘いつわりのない心を言います。

人間はとかく口ではうまいことを言いながら、心の中ではまったく逆のことを考えていたりするので、せめて心の中だけは、まごころを持ちたいものです。

「深心」とは、読んで字のごとく、深く信ずる心と言います。まづ始めにみずからを深くみつめて、反省する心を持つということです。我々は自分ひとりて生きていますように思ったりしていますが、実は何ひとつとして、他の人の力を借りずには生きられないものなのです。人間は空気・水・日光等がなければ、体の維持ができませんし、食べ物ひとつを考えてみても、多くの植物・魚類・動物等の犠牲の上に成り立っているのです。また日常の生活を考えてみても、家

族はもとより多くの他の人々の力を借りて、いいかえれば、おかげを蒙って生かされているのです。そのような中で、私たちは一体どれだけの恩返しをしているでしょうか。自分の置かれている場を考えてみて深く天地万物の恵みに感謝すべきではないでしょうか。

また、そのような気持ちになれば、阿弥陀様が念仏を唱える人を、常に見守り下さり、加護・慈愛の恵みを与えられ、臨終の時（命終るとき）に多くの菩薩を引きつれて、浄土にお迎え下さるということになると言えましょう。

「回向発願心」とは、日常生活の中の善い行ない（善根）を、みな浄土に往生するための善根として、ふりむけようとする心です。

この「三心」は、身につけることがやさしいようで難しく、難しいようでやさしい心ですが、法然上人はぜひ念仏の信者がこの「三心」をそなえるべきであると申されております。

法然上人の御遺訓「一枚起請文」の中にも「三心四修と申すことの候は皆決定して、南無阿弥陀仏にて往生するぞと思いうちにこもり候なり」と説かれており、一心に念仏を唱えるうちに、「三心」を

意識する、しないにかかわらず、「三心」が身にそなわつてくると述べられているのです。

また、名号は「万徳の帰する所なり」とも言われますように、善根の源でもあります。

ぜひ、この「三心」を念仏生活の中心にすえて、日々の生活を阿弥陀様のおまもり（加護）のもとにおくりたいものです。

法然上人の和歌を一首ご紹介しておきます。

法然上人は、「三心」の中の「至誠心」のこころを次のように詠まれています。

「至誠心」

往生は、世に易けれどみな人のまことの心なくてこそせぬ

「心の時代」

ここ数年、テレビや新聞、雑誌等で「飽食の時代」とか「心の時代」とか、随分言われています。

高度経済成長の時代から安定成長の時代へ、そしてまた、物の時代から心の時代へと現代社会への見方、考え方が変わってまいりました。ある新聞では、「日本人の心

はどこへ」といったような連載物の記事もあり、本来の日本人の心が薄れつつある今日を憂いているものもありました。

私たちは、目先のことに心を奪われ過ぎて目には見えない大切な物を失いかけており、真の「心の時代」はまだまだという気がしてなりません。

つい先日、これは私ども深谷と岡部の青年僧侶二十八名で組織しています、仏教青年会の一大事業であります。瀬戸内寂聴尼上人、高田好胤上人、正司秀明尼上人、そして昨年は藤井正雄上人をお迎えし、本年三月に無着成恭上人をお招きし、おかげさまで今回も千人を超える多くの方々にお聞きいただいたわけでありますが、講師である無着成恭上人と昨年の暮れ、打合わせのためお話をした時に、無着上人は、「二十一世紀に生きる子供たちのために、私たちは何か残しておかなければなりませんね……。そして、それは私たち日本人の持つ伝統的な心の継承であります。世の中では心の時代といわれていますが、いま、何故、心の時代なのでしょうか……。」と、このときに上人から講演会のタイトルについてご示唆をいただいた

のであります……。

戦後の日本は、アメリカに追いつけ、追い越せを目標に復興に努め、東京オリンピックを機に高度経済成長の波にのり、いまや世界をリードする経済大国になりました。しかし反面、日本人に対する諸外国の人たちは、経済は一流、生活は二流、人としては三流とまで酷評され、うさぎ小屋に住む働きバチ、エコノミックアニマルと呼ばれています。ある一時期に、「小さな親切」運動が展開され、豊かになってきた日本に浮かれることなく、心を大切に、他人への思いやり、気配り等、身の回りの社会や人を大切にしないと心がなくなりますます……、という警告もありましたが、自分さえ良ければ他人のことはという風潮は一層高まり、小さな親切大きな迷惑とまで言われるようになり、他人に対して無関心、物事に対して無感動になってしまいました。まさに「物豊かにして心枯れる」という人間像が浮き彫りにされてしまったと言っても過言ではありません。

無着上人は、「心の時代はまだ……。今は、心の時代の準備段階である」と言われ、また、松原泰道上人は「人間の心の機能を開発する時代」と現代・今日を語

っています。

昨年、ある大手の会社が全国の園児、小中学生七千人を対象に実施いたしました二十一世紀子どもアンケートの調査結果によりますと「子供が大人になってからも大切にしたいもの」という質問に対しての答えの第一位がファミコン、パソコンであったそうであり、続いて、両親、友達、ぬいぐるみの順で具体的に「お母さん」と答えたのは六番目、「お父さん」にいたっては何と十六番目で、犬や猫などのペットより低かったそうであります。

この調査結果がすべてではありませんが、必ずしや来る高齢化社会を目の前にして、私は一抹の不安を感じるとともにあらためて宗教情操教育に基づいた家庭教育の重要性を痛感いたしました。

物が豊かになった分、心が閉ざされてしまった今日、私たちは、仏教伝来以来、永年にわたって日本人の心を培ってきた「智慧と慈悲」、宗教情操を礎とした家庭生活の中で人間本来のやさしさや広く豊かな心を養いつつ生きていくということが、私たち、生かされている命を大切にすることが、私たちが、生かされている命を大切にすることが、

ということとは、「人にほめられるのではなく、仏さまにほめられるように生きる」ことであります。

私たちは、自分ひとりの力では生きていかれません。必ず誰かの世話になり、目に見えない大きな力によって生かされているのであります。その大きな力が阿弥陀さまの大慈悲なのであります。その大きな力に感謝をして、私たちは、おかげさまでということをおかげさまでということを「ナムアミダブツ」とお称えるのであります。

法然上人は、「ただ一向に念仏すべし」とおすすすめなされ、お念仏を喜ぶ日々の生活の中で、相手の気持ちを察し、相手を喜ばせ、相手に折れることのできる心がいつとはなしに養われるのであります。

察し合い 喜ばせ合い 折れあって 合わぬ性分 合わす合掌
南無阿弥陀仏



建曆二年正月二十三日

大師在御判

『一枚起請文』

もろこし我が朝に、もろもろの智者達の、沙汰し申さるる觀念の念にもあらず。又學問をして、念の心をさとりて、申す念仏にもあらず。ただ往生極樂のためには、南無阿彌陀仏と申して疑なく、往生するぞとおもいとりて、申す外には別の仔細候はず。ただし三心四修と申すことの候ふは、皆決定して南無阿彌陀仏にて、往生するぞと思ふうちに、こもり候なり。この外に奥ふかきことを存ぜば、二尊のあわれみにはずれ、本願にもれ候ふべし。念仏を信ぜん人は、たとひ一代の法をよくよく學すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同じうして、智者のふるまいをせずして、ただ一向に念仏すべし。

為証以兩手印

浄土宗の安心起行、この一紙に至極せり。源空が所存、此の外に全く別義を存せず。滅後の邪義をふせがんがために、所存をしるし畢んぬ。

これは、浄土宗の日常の勤行や法要等の中で、よく読まれる『一枚起請文』であります。念仏の元祖法然上人の御遺訓であります。

この『一枚起請文』のお心というものに触れてみたいと思います。

この『一枚起請文』と申しますのは、浄土宗をお開きになられた法然上人が御入滅される二日程前——(建曆二年一月二十三日)——に、永年上人に常随給仕しておられた弟子の勢観房源智上人というお方が、「浄土の念仏の肝要な点をひと筆お書き残し下さい」と懇願されてお書き戴いた、いわば遺言状ともいえるものでございます。

さて最初の一文ですが、「法然上人の勧められたお念仏は中国や日本において色々な仏教先覚者の述べているところの觀念の念仏ではなく、また色々と學問をして極める念仏でもありません」と言っています。

そして次の一文が、法然上人がこの起請文の中で何よりも申されたかったところでありまして「西方極樂浄土に往生する為には一心に信じ切つて南無阿彌陀仏とお唱えする以外には他に何もありません」と法然上人の開かれました浄

土往生念仏についての精髓と申しますか、エキストもいふべきものがこのところには凝縮されています。

次の一文を見てみますと「三心四修」ということが念仏の心得として必要であると言われていますが、一心に真心を込めて往生を願うお念仏の中にはおのずと備わっているものであるということと述べられておられます。

三心といふのは、至誠心・深心・回向発願心のことでございます。誠に、誠の素直な心で阿彌陀仏の教を深く信じ浄土に生まれたいと願うお気持ちであります。また四修といふのは、恭敬修・無余修・無間修・長時修でありまして、敬いの態度をもつてお念仏以外は考えず絶えず相續していく念仏者の生活態度のことでございます。

そして次には、「一心にお念仏を申す以外にあれこれすることはお釈迦様と阿彌陀様の申されるところと相違してしまふ」と言われています。「念仏を信じようとする人はどんなに仏法を學んだとしても一文不知の愚鈍の身と同じくして、又尼入道の無知の者達と同じように賢くぶることなく、只、只一心に念仏を唱えなさい」と悟されております。



そして最後に日本古来からの習しであるところの両手の印をもつて証しとされて「浄土宗の念仏についての心のすえ方やお勤めについてはこの起請文の中に筆舌し尽している」というように述べて終られていきます。

『一枚起請文』のお心にふれていただいたことをひとつの仏縁としまして、今後の信仰生活の一助としていただければと思います。